

【各施設の技術と特徴】

リサイクルの種類 (事業者名)	リサイクル技術・施設の特徴
サーマルリサイクル (オリックス資源循環(株))	・熱分解ガス化溶融炉(サーモセレクト方式)
総合リサイクル (株エコ計画)	・衛星車両運行管理システム(GPS) ・活性炭噴霧、触媒方式(サーマル) ・低温バグフィルター(サーマル) ・密閉コンベア(肥料化、破碎・圧縮)
廃プラ・生ゴミリサイクル (株環境サービス)	・肥料製造に自社開発の発酵種菌
生ゴミ・食品リサイクル (株アイル・クリーンテック)	・パレット式自動倉庫 (パレットごとに原料属性管理、出荷別配合管理、 温度・水分管理等の戸籍管理する高度な品質管理) ・コンピュータによる完全自動管理
廃蛍光管リサイクル (株ウム・ヴェルト・ジャパン)	・汚染土壌の浄化技術を水銀回収に応用
建設廃棄物リサイクル (埼玉環境テック株)	・複合型建設副産物再資源化施設 ・焼却、薬剤処理の工程がなく、屋内ですべて処理、 各処理施設を1箇所に集約
焼却灰リサイクル (株埼玉ヤマゼン)	・焼成・安定化处理による灰溶融(特許取得) ・圧縮機固形燃料化
廃発泡スチロールリサイクル (広域廃プラスチックリサイクル協同組合)	・減溶回収車によるコスト/エネルギーの低減 再生品がバージン材と同等の品質
汚泥等リサイクル (よりいコンポスト株)	・高速微生物発酵培養システム (同社で開発した種菌の代謝活動と有機物の分解熱に より水分を除去し、植物が吸収しやすい有機肥料を 大量かつ短時間(8日間)で生産する。)

イ 研究・開発の状況と課題

事業者が現在行っている研究・開発の状況については、主に、プラントの運営に伴う廃棄物の検査や、リサイクル製品の品質向上などに取り組んでいます。

事業者は、市場競争の中で、技術の進展や廃棄物の需給動向に合わせて、常に事業を革新していくことが必要であり、研究・開発や新技術の導入に高い関心を持っています。資源循環工場は操業間もないこともあり、今後、本格的に取り組を進めていくものと考えられます。

一方で、新たな技術の導入は、法規制や地域への影響などの点に考慮しながら進めていく必要があります。

このため、今後、資源循環工場における研究・開発などが円滑に進むよう、事業者が取り組みやすい仕組みづくりを、地域の理解を得ながら、官民で整えていく必要があります。